
守るから～Legend of girl of fantasy～

朝野 昼香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守るからLegend of girl of fantasy

【Nコード】

N9132H

【作者名】

朝野 昼香

【あらすじ】

例えば。この世界は魔女が存在する。この世界は魔法が存在する。この世界は人間も存在する。いわゆる、ゲームの世界。現実世界の人が作り出した幻想。現実世界の人が作り出した理想。現実世界と、理想世界。その全てをつかさどる天界。それを客観的に見る者、滑稽なほど足掻く少年達。魔女の呪いを解け。

プロローグ

この寒村では、海は常に凍っていた。

年に数週間の夏に、凍結した海の一部が溶ける。

ルーはその溶けた日に、毎日妹のルナと海を見に行っていた。

病弱な双子の妹は、海を見るのが大好きだ。

こんな真冬の日に、それもさっきまで細氷が降っていた日に海が見られるだなんて。

そんな景色に、半ば感動の様な感覚を覚えた。

煙って上に行くんだっけ？ 下に行くんだっけ？

そんな疑問が10歳の少年の脳内に過ぎった。

「ルナあーっ！ 母さーんっ！ 父さーん！」

ルーは大声で叫ぶ。

しかし、その叫び声はたくさんの断末魔と、炎のカーテンによってかき消される。

こんな暑さを体験することは、今までもこの先も無い。

ルーは、戸惑いと恐怖に足がすくんでいた。

炎の海。

それは、ルーを今にも飲み込もうとしていた。

四面楚歌。ルーの逃げ場は無い。

ルーが見えていたのは、自分が焼死することだった。

死を受け入れない少年はただ涙を流すことしかできなかった。
熱いよ。熱い。助けて！

ルーの中で声にならない叫びが涙と共にあふれた。
絶望でその先の光さえ見えない。

天を仰ぐ。

天を仰いで何をする？
命乞いを——！

第一話 金欠と少年巷

小説の始まりというものは、主人公が日常的現実世界からある日切り離されるところから始まるものだ。

ライトノベルといった類のものは、特にそう言うことが多い。

主人公は、現実世界で現実的な生活をしていた。

ある日突然、何かの出来事や、浮世離れたヒロイン、もしくはそれに値するものに出会い、物語が始まる。

大人気のライトノベルは大体そういった始まりだ。

まあ、絵師の力が強いと言ったら、それでおしまいなのだが……。

それはとにかく、私の持論であるが、人と言うものは常に理想を追求する生き物だ。

理想を追求し、それを実現させる。

とある科学者も、人が想像できることは必ず実現できると言い残している。

ここは、理想の世界。

不可侵の理想の世界。

この話の主人公、ルー・エデノグレイスは、上記の『小説でのお約束』に該当するであろうか。

良くある、住民が普通の人間ではない集落で生まれ育ち、良くある大災害に会い、そして、良くある人間離れた少女に出逢った。

そう。これは、良くある人間の理想の世界の話なのだ。

主人公は、大切な少女を守るために戦う。

そして、たくさんの大切な仲間達と出会い、たくさんを知ることを知る。

……これではただのゲームの世界だ。

まあ良い。そのようなことには目を瞑ろう。

私はこの理想の世界をただ傍観する。
それだけが望み。

そうできるかどうかは、私自身の心であるが。

では、ルー・エデノグレイスらの健闘を祈って。

フローリアン・ガーディ

通常の二倍サイズはあるジャンボソフトクリームが溶け、ミュウの頬にくっつく。

「ミュウ、溶けてるぜ」

ルーがそう言うと、彼と肩を並べて歩くミュウは「ありゃりゃ」といいながら頬をこすった。

その子供っぽい仕草にルーは微笑む。

ミュウはこちらをじっとみる。

「何かな？ ルー君」

ルーは思わずどきりとし、赤くなる。

「いや……別に、な、何でも」

ミュウはにっこりと微笑み、再びソフトクリームを食べるのに集中した。

その幸せそうな顔を横目でちらりと見て、ルーは満足感に近いものを覚えた。

ミュウの執事的存在、ルー・エデノグレイス。

イルジョーネ国の北にある寒村、レゼント村出身。

身長は174cmと並。

紫色の長髪に、青いコート。

年齢は18歳。

一方、こちらの少女、ミュウ。

クリーム色の巻き毛、褐色の大きな双眸。

幼い見た目であるが年齢は15歳である。

いや、一応15歳に見えるのだ。不思議なことに。

そんなミュウとルーが出合ったのは8年前であるが、ミュウは未だに謎めいたところが多い。
彼女の家族は分らない。

8年間、特に違和感無くずっとルーの家でミュウは暮らしてきた。

まあ、それはともかく。

「ルー君、ルー君」

今日も、ミュウは邪気の無い瞳でルーのコートの裾を引っ張る。

ちなみにソフトクリームは既に平らげられている。

「うん？ 何だ」

ルーは必要以上に甘い声を出し、ミュウに返事をする。

「お昼、食べよう」

今食ったばかりだろう、と心の中で毒づく。

しかしミュウに頭の上がないルーは、それを受け入れるしか選択肢が無いのだ。

そう自分に言い聞かせながらも出た答えが、

「ミュウ、でも……」である。

「ほら、早く早く！」

ミュウは俺のコートの裾を引っ張る。

意外と強い力だ。

そしてミュウが指差すレストランに半強制的に俺は連れて行かれた。そこは、小さいながらも繁盛しているようで、席全てが、人で埋まっていた。

店は前述の通り小さく、喫煙可のようで紫煙が店内に満ちている。

俺はとにかく、ミュウが煙草が苦手だ。

ミュウは小さく咳き込む。

早く席空かないかな、と思いながら店内を見回した。

「ミュウ、紫煙きつか？」

俺の後ろで咳き込むミュウに言う。

しかし、ミュウは笑いながら「大丈夫だよ」と言う。

強がっているのか、本当なのかどうなのかは知らないが、まあミュウが平気と言うのならいいだろう。

あまりしつこく気を遣うと、ミュウは逆に怒ってしまう。

どうしようか。

空く気配が無い。

そう思っているときだった。

「あ、空いた」

ミュウが奥のほうの座席を指差した。

そこには、ウェイトレスがいて、その座席の皿を片付け、テーブルを拭いていた。

よし、行こう。

そう思い、歩を進めようとしたときだった。

「いった……」

誰かが俺にぶつかった。

俺は何がぶつかったのかと、辺りを見回す。

しかし、それらしき人物はいなかった。

「下よっ、見えていないの？」

下方から気の強そうな幼い声が聞こえる。

何かと、俺は下のほうを見た。

そこには、銀髪を二つに結んだゴスロリ少女がいた。

俺は呆然とした。

この国に、銀髪なんて（紫色の髪の俺が言える口ではないが）滅多

にいない。

しかもゴスロリだ。

こんな都市伝説みたいな格好をした人物に会えるなんて……。

が、そう考えている間にも、少女は「気をつけなさいよね」と言い、店を出て行ってしまった。

まあ、言うまでも無く、この少女がこの物語にこの後、関係してくるわけだ。

しかも、あまりうれしくない（いや、嬉しいのか？）ポジションに、つくわけだ。

注文をし終え、椅子に深く座りなすと、疲れからかため息が出た。あの後、無事に押し入るように席を確保出来た。

「オムカレー二つお持ちしました」

店員と思しき人物が、オムカレーの盛られた皿を手にとって来た。それまで今か今かと水をちびちび飲んでいたミュウは、再び目を輝かせ皿をひったくるように取る。

そして、どこから来るのやら物凄い勢いで食べ始めた。

餌にありつくハイエナの如く。……例えが悪いな。

俺もオムカレーを食べるにして、スプーンを構える。

ふと、なんとなくカウンターの方を見てみるとチラシが貼ってあった。

なんて書いてあるかは読めない。まあいいか。見るなら勘定するときに見ればいい。

さて、早く食べなきゃ折角のオムカレーがさめてしまう。

頂きます、と俺は手を合わせ、オムカレーを口に運んだ。
ちなみにオムカレー、本当に美味しいぞ。

「あははは、満腹だよ」

全く膨れていない腹を擦り、満足げな表情でミュウは言った。
俺の方も満腹だ。腹が蛙の様に膨れている。

さて、勘定だ。

俺たちは席を立て、レジの方に行き、注文表をレジ係の人物に渡した。

コートから黒革の財布を取り出す。

逆さにすると、小銭が四、五枚落ちた。以降、落ちる気配なし。

ちょっと待て。たりるのかよ。

オムカレー二つ、消費税込みで1260ゴールド。

恐る恐る俺は落ちた硬貨を見てみた。

初代国王、イルジョーネ1世が描かれた500ゴールド硬貨、二つ。

そして、国の発展に尽力した研究者、ウィリアム・カレスチャが描かれた100ゴールド硬貨、一つ。

イルジョーネ国国花、菖蒲が描かれた50ゴールド硬貨が一つ。

そして、特に何も描かれていない10ゴールド硬貨が一つ。

さて、問題。俺が持っている効果を全額合わせると何ゴールドになるでしょう。

答えは、1160ゴールド。

その回答に、俺は引きつり笑いを浮かべてしまう。

「ミュウ、今いくら持ってる」

耳に手をあて、できるだけ声が漏れないよう囁いた。

「え、お金？ あはは、仕方ないなあ」

ミュウは頬を膨らましながらかも笑うと、ロングスカートのポケットをこそごと探し始めた。多分。

金が無くなったのは誰のせいだ、というのは心の内に止めておこう。去年の旅初めには、膨れていた革財布だった。しかし、度重なる出費（主に食費）により僅か一年で無くなり、今ではただの革と化した。

「あ、あつた」

首を上げるミュウ。

顔には満面の笑みが広がり、手には数個の飴玉。

よく見ると、その笑みは引きつっている。

これでどうしろと言うんだ、ミュウさんよ。

俺は泥団子を笑顔で受け取れるほど大人ではない。一応貰ったが。

結局、俺の革財布が100ゴールド代わりとなり、無事帰ることが許された。

俺たちは、街中をとぼとぼと歩いていた。

それにしても、これから先、どうするんだ。

絶望と言う名の暗く深い崖に落ちてしまった心。深いため息をついた。

なんだか涙が出そうになったが、一応これでも18だ。必死に堪える。

ガクリと首を折ったときだった。

不意にコートの裾が引つ張られる。

何事かとうなだれていた頭を起こし、めんどくさげに振り向いた。

左手で裾を引つ張り、右手で印籠を見せ付けるかのように、俺に何かを見せ付ける。

その顔は、絶望とは無縁の希望に満ち溢れていた。

「これ」と、握る手に力を込めるミュウ。

一体何が、と思いつつ見てみる。

それは、勘定の時に見ればいいと思っていたのだが、すっかり忘れていたチラシであった。

ここからなら楽々読める。

「『闘技大会XXX』？」
スリーエックス

思わず、声が出る。なんだ『XXX』って。

詳しい説明をと、大きく書かれたタイトルの下に目をやる。

「日時は明日午前十時、コロシウムにて。優勝者、賞金……、ひゃ、100万ゴールドっ!？」

つつい声が大きくなり、いくつもの視線を感じる。

絶望の淵から舞い戻れたと思ったらまた戻ってしまった。

その内、心が折るんじゃないか、俺。

そんな俺を無視し、ミュウが話を進める。

「お金が無いんだから、出るしかないってば。頑張ってね。ルー君」
肩をぽんぽんと叩く。人事みたいに言わないでくれ。

こうして、『XXX』などという妙な大会に出ることになった俺達なわけなのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9132h/>

守るから～Legend of girl of fantasy～

2010年10月20日13時33分発行